報　告　書

作成者：MORE 企画 白井ゆみ
作成日：2024/6/28

1 プロジェクトの概要

タイトル	伊豆半島一掃！海と日本プロジェクト＠静浦
実施目的	主な目的は、【生態系の保護】【環境保全】【公共の利益の向上】【社会的責任の履行】の 4 点です。海中のゴミを放置しておくと、そこに住む海洋生物に危害を及ぼし、ひいては海の生態系に悪影響を及ぼします。また、海岸に流れ着いたり水面に浮かんでいたりすることで景観も損ないます。水中清掃を行うことで、海の魅力をさらに高め、生態系を保護し、社会貢献活動として街全体の価値をあげることに繋がります。

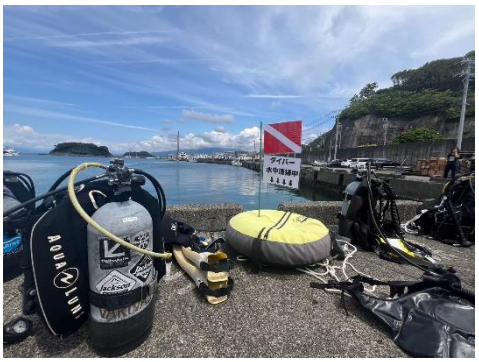
2.プロジェクトの詳細

内容	今回第一回目となる水中清掃を実施したのは、沼津市の静浦漁港（静浦マリーナ）の湾内。一度も水中清掃をしたことがないこの場所には、下見の段階で色々なものが落ちていることを確認。作業潜水に長けている熟練のスクーバダイバーを募り、有償のボランティアとして水中作業を実施してもらった。ヘドロに埋まっていたゴミも多く、実際には下見の予想をはるかに上回る量のゴミが引き上げられた。
期間	2024 年 6 月 3 日（月）9 時 30 分～14 時 00 分
場所	〒410-0105 静岡県沼津市馬込 19-4　（0559-33-3600）
主催	株式会社富士ボーティング（代表：岩崎）
実行	MORE 企画：静岡県の伊豆にて環境活動に取り組む、非営利団体（主催・運営・企画）
協賛	日本財団、しずぎんふるさと環境保全基金、一般社団法人中部地域づくり協議会、伊東市 SDGs 補助金、株式会社タバタ、沼津ふなと干物、はなぱん、Gramma シーサイド店、OH!LIFE 他
保険	あいおいニッセイ同和損害保険（傷害：潜水作業あり、潜水作業無し両方）
水中班	苅部徹、松崎剛、佐野健太郎、八木克憲、泉光幸、矢北拓也、熊切杏里
陸班	白井ゆみ、勝田南央、大石彩夏、土井佑太
安全管理	(1)事故発生時にはマリーナの「事故発生時の連絡網」に従って対応する。 　海上保安庁：118　消防：119　警察：110 　近隣の病院：マリーナの事故発生時の連絡網に従う 　軽症の場合：マリーナの事故発生時の連絡網に従う 　重症の場合：マリーナの事故発生時の連絡網に従う (2)水中・水面のダイバーと船舶の接触を最も避けなければいけないので、1 チーム毎に水面での安全管理ダイバーが水面で国際信号旗 A 旗を取り付けたフロートかブイを保持して、その下をダイバーが潜るようにする
ゴミの処理	静浦漁協へ一時保管したのち県が引き取る（通常は引き取らないとのことだが、自身もゴミ拾いをしている蓮池議員の協力があり、今回は交渉ののち沼津土木事務所引き取ることとなった）

3.実施実績

量	1 トン以上（2.5 立米分のコンテナが満タン）
内容	便器、バッテリー、パイプ、ホース、バイク、鉄くず、空き缶、ペットボトル、トタン破片 陶器、釣り具、タイヤ、船のエンジン、船のスクリュー、ワイヤー、車のフレーム、電池 ハサミ、ホース、ガラス瓶、プラスチックケース、アルミ、衣服、バッグ、ビニール破片など
詳細	岸から離れたところにはゴミがさほど落ちていなかったことから、岸壁沿いから意図的に不法投棄をしたものと推測。廃棄の際に有料となる物が多く、個人、産廃業者、窃盗犯などが捨てたと思われる。特に、便器などは有料でも行政が引き取らない地域が多く、処分に困った個人が捨てた便器やトイレのタンクを山林でも見かける。加えて、静浦漁港・マリーナ付近は釣りの人気スポットとなっており、釣り具が絡まった状態のパイプや釣り竿も多く見つかった。

4.実施の様子と内容

流れ	準備	08:30～09:30 MORE 企画、静浦マリーナ代表、ヤマハマリーナ代表、漁協関係者 運営スタッフ現地到着、挨拶、各種確認、テントや椅子の準備
	集合	09:30-10:00 参加者集合、器材セッティング、挨拶、陸と海の流れ説明
	準備	10:00-10:30 港へ移動、開始への最終チェックと準備
	入水	10:30-10:45 チームごとにフォーメーションの相談、エントリー開始 

	潜水作業１	10:45-11:30 海の作業ダイバー6 名と撮影係 1 名が入水。2 チーム（1 名水面、2 名水中）に分け、水面係は水中と陸との連携や指示を担当。漁船の往来もあるため、フロートにダイバーが作業中であることを知らせる A 旗と注意喚起の旗を用意。 ＜使用道具＞ ・A 旗のついたフロート ・メッシュバッグ（フロートの下に伸びるロープに固定） ・陸から引き上げる用のロープ ・リフトバッグ（重い物を水底から水面へ引き上げる用） ・フォークリフト（陸へロープで持ち上げられない重さや形状の物用）

<table>
<tr><td rowspan="2">流れ</td><td>休憩</td><td>11:30-12:30
一度目の休憩。協賛品のシュークリームやクッキー、カナッペなどを提供。ホットコーヒー、アイスコーヒー、さんぴん茶、協賛ドリンクなども用意。

 </td></tr>
<tr><td>潜水作業 2</td><td>12:30-13:30
二度目の潜水作業、一度目の終わりから開始。チームやフォーメーションは一度目と同様。水中も陸も手順に慣れてきて、大きい物が次々と見つかる

作業終了後は、器材をフォークリフトに乗せてダイバーたちは岸壁に設置されたハシゴで陸へ上がった。その後、器材をシャワーで洗い水中清掃終了。

 </td></tr>
</table>

	昼食	13:45-14:30 協賛品のサンドイッチと総菜パン、フルーツ、ドリンク等を提供。水中は陸よりも体力を消耗するため、休息もしっかりと取る必要がある。
	終了	14:30-15:00 記念撮影、終了の挨拶、協賛のお土産のお渡し、片付け。 釣り人とダイビング、漁協関係、マリーナ関係の話をする場面もあった。

5. 反省・改善点（アンケートや直接届いた感想など）

良かった点	・周辺地域の企業や個人の協力や協賛を得られた（おやつやランチが美味しかった） ・漁協の協力を得てゴミ処理のルートや重機などきちんと確保できた ・他店のインストラクターや他業種の方々と交流できた ・様々なゴミの回収方法（適切な道具の選定など）を学べた ・安全管理に対する対処方法を改めて学ぶことができた ・LIVE 配信や記録係など次につなげるアクションも起こすことができた ・MORE 企画は陸にいたことで作業者たちのサポートができて良かった ・フロート近くに水面係を設置したのは安全管理上とても良かった ・ボランティアでは限界があると思っていたことに原資を調達してできたこと
改善点	・陸上で引き上げる役の男性ももう少し増やした方が良い ・ロープの数を増やして、海中でロープを投げ返してもらう待ち時間を短縮する必要がある ・アップダウンが多くなってしまった（減圧症のリスクは否めない）ので、アップダウンを最低限にするフォーメーションをするよう注意喚起が必要だった ・今回よりも深い場所での作業は、リフトバッグ＆ロープで打ち上げる必要がある ・表に看板や旗を設置するべきだった（立ち入り禁止エリアなので入口がわかりづらい） ・水面係が各チームにもう 1－2 名いても良いかもしれない（シュノーケルでも可） ・透明度、水温、深度、水底の構成（砂、ヘドロなど）によって作業の難易度が上がるため、下見の段階でベテランダイバーに同行してもらうのが良い。 ・今回を基準としたときに、これ以上過酷な作業にあった場合のことを考える必要がある
その他	・とても良い経験をさせていただきありがとうございました！ ・作業開始からの段取りや改修後のゴミの後始末など、イベント準備の徹底ぶりに脱帽です ・引き続き参加したいと思います。ありがとうございました！ ・マリーナさんだけでなく漁協さんも積極的に参加していただいて、さらに近隣のいろいろな業種の方に協力いただいて本当に良いイベントだったと思います。 ・ずっと気になっていた MORE 企画さんと活動ができ、お話しも直接聞けてさらには他業種の方のお話しなど有意義なイベントでした。 ・ベテランのインストラクターたちもこのイベントから学ぶことがいっぱいありました。 ・何回かやってある程度形ができてきたら、ビギナーインストラクターへの教育の一環として混成チームにしてやり方も次世代へ伝えていきましょう。 ・オール素晴らしかった！ ・これを水中清掃業者に頼んだらとんでもない金額でしょう。みんなが win-win の状況を作っている素晴らしいことだと思います ・清掃活動に多くの力が結集して大成功を収めたこと。怪我も事故もなし。素晴らしいです。 ・地域の方の協力体制を作っていることは本当にすごいと思いました

運営の感想	＜目的に対して＞ 今回の目的は水中清掃が主だが、同時に清掃をする人へ報酬を支払う「有償のボランティア」として作業をしてもらうことでもあった。ボランティアが無償だとの前提を崩すことで、無償のボランティアの「不安定なやる気」に頼る必要がなくなると考えてのことである。散乱ゴミや不法投棄を無くして行くと共に個人が出すゴミの量を減らし、ゴミ拾いをしなくても良い世の中になることがゴールではあるものの、それでもまずは「有償のボランティア」の実現にひとつ理想のゴミ拾いに近づいたと感じた。今回は、日本財団をはじめとする各団体の助成金と個人や企業からの協賛金で、ダイバーや撮影係への支払い、保険代やシリンダー代、運営側の交通費等も算出することができた。また、軽食や昼食、お土産の提供も協賛で可能となり、作業をしてくれた皆へ予想以上にお返しをすることができた。しかし規則上、運営側の人件費などへは助成金を使用することはまだ難しく、運営（MORE 企画）自体の持続可能な形を見出していかなければいけない。支払いをするためには助成金や寄付金が多額に必要であるのと同時に、いかに経費を削減できるかがカギとなる。今回のように、周辺地域を巻き込み、協力者を一人でも多く増やすことは、一見すると難儀だがゴールへの最短ルートだと考えている。 ＜技術に対して＞ 今回のように過酷な環境で、危険が伴う水中清掃はプロダイバーの中でも更に特殊な経験や技術が必要となる。今回は、運営側がすでにその腕前を把握しているダイバーたちに直接声をかけたのもそのためだ。これらの技術は一昼夜で取得できるものではなく、また特殊な訓練が必要とされるため「インストラクター」と名がついているからと言って持ち合わせているものではない。何度か回数を重ねて運営側にもノウハウがある程度培われてきたら、彼らの技術を次世代へ継承していくためにも、各チームに経験の浅いプロダイバーを配置するのも検討したい。そうすれば私たちの企画が単に水中を綺麗にすることだけではなく、特殊な技術を持ったダイバーの育成をもできる場になるのではないだろうか。 ＜まとめ＞ 周辺地域や行政を巻き込み、ダイバー同士のつながりを強化し、他業種間の交流にもなる。そのような業種や業界、職種や立場を超えた、人と人との繋がりが生まれ、更にそれが自分たちの自然環境を守っていくことに繋がるのであれば、こんなに嬉しいことはないと思った。改善点はあるものの、現時点で出来る最大の準備と手配は計画通り実行できたので一安心である。しかし、ゴミ問題は想像を超えて危機的状況にある。すでに複数の港やマリーナから依頼をいただいているため、次回の開催へ向けて早急に日程や下見の調整をしていく。
メディア	東京新聞 https://www.tokyo-np.co.jp/article/332469?rct=sizuoka PADI https://blog.padi.com/jp/izuhanto-isshuu-umitonihonproject_2024/ YouTube https://youtu.be/-nUcUcm2658?feature=shared